

電子掲示板における「常識」への訴えの役割

—正当化ストラテジーと「常識」の関係—

ウンサーシュッツ・ジャンカーラ (立正大学心理学部 専任講師)

On the function of calls to *common sense* on internet forums:
The relationship between legitimization strategies and *common sense*

UNSER-SCHUTZ, Giancarla (Assistant Professor, Rissho University Faculty of Psychology)

Abstract

Jōshiki 'common sense' is a common keyword on the internet advice forum Hatsugen Komachi, but it is not immediately apparent why it appears so frequently. One reason may be that it plays a central part in the legitimization of actions. Although often seen as an important aspect of political discourse, legitimization is also a common part of everyday life whenever individuals commit acts not approved by others, or assert views not supported by others. By providing users with anonymity and the ability to connect with a wide number and range of people, Hatsugen Komachi can be a prime location to pursue legitimization. *Jōshiki* appears to play a part in this as making appeals to it—and its negative, *hijōshiki*—allows posters to position themselves as rational individuals, one of Reyes's (2011) five legitimization strategies. Detailed analysis of core posts using (*hi*) *jōshiki* to describe either the poster or other individuals suggests that when successful, such strategies go largely unnoticed, but can become subject to criticism when consensus is not gained, reflecting Ishii's (2001) insight that things assumed to be common sense are under-analyzed, and those not, stand out.

Key words : discourse strategies, internet forums, common sense, legitimization

序 論

日常生活において、誰にでも他者の期待に反する行動を行う、あるいは他者が同意できない信念を持ち抱えることがある。他者に知られずに済むものは別とし、相手に知られてしまう場合は、葛藤を避けるべく、自分の行動や信念が妥当であることを示す必要がある、つまりその正当化に努めざるを得ない。「正当化」と言われれば、Van Leeuwen & Wodak (1999) が観察した行政関係の問題が想像されるが、正当化が要される行動は必ずしも命にかかわるような深刻な問題でない。日常生活においても、例えば他人が隣り合わせて座れるよう、混雑の電車で座席を詰めるべきか否かといった他愛無い問題でも、適切な行動や信念に対して疑問がある場合は、正当化が求められる可能性がある。正当化の方法の一つは、「常識」すなわち誰もが持っているまたは持つべきとされている知識等に訴えることである。「常識」への訴えには、自分が常識的であることをアピールする方法と、一方で相手には常識がないことを主張する方法の二法があり、いずれの場合でも、

自分を常識の持ち主として位置付けることにより、相手が正しい行動や信念を行っていない・持ち抱えていないという主張につながる。

しかし、実生活において、このような正当化をすることは決して安易なものではなく、他者に認められなかったときの精神的損失が大きいと考えられる。他者と積極的にコミュニケーションに取り掛かりながらも、実生活における損失を最小限に抑制できる点において、匿名の電子掲示板が、正当化を試みる場として最適だと予想される。この推測を確認すべく、本研究においてアドバイスの提供・取得が目的だという人気掲示板「発言小町」において正当化を試みる際にユーザーがいかに「常識」に訴えるのかを観察し、その分析を行う。発言小町とは、コミュニティ性の高い電子掲示板であり、主な活動が、アドバイスを求める投稿によるやり取りである。アドバイスといわれると、問題解決につながる具体的な対策に関する助言や提案が思い浮かべられるが、発言小町の特徴の一つとして、アドバイスの求め方が、行動や信念の適切性の確認、またアドバイスの提供の仕方が、行動や信念の適切性の賛否という

形を成していることにある。こうして確認の形を取る投稿では、「(非)常識」が頻繁に出現し、冒頭で挙げた座席を詰めるべきかの例も、その一つである(例1: 間宮, 2015)。なお、例では「/」が改行を示す。

例1: その場合、あなたはどちらかにつめてあげて、二人組を隣り合わせにしてあげますか? / 私は毎回、気付いたときはそうしています。その際、いつもお礼を言われて気持ち良く譲れるのですが…これは【常識】でしょうか? 【親切】でしょうか? / 私は【親切】のつもりでいました。

上記を踏まえ、本研究において批判的談話分析の観点から「(非)常識」への訴えの事例研究となる投稿の分析を試みる。「常識」に訴えることが行動や信念の正当化につながるが、他利用者との位置付けのずれにより反対に行動の非正当化に働くことも見られる。その結果、常識とされている中身が利用者の相互行為によって交渉され、対話的に成形されていく。Androutsopoulos (2013) が指摘するように、インターネット上の談話を社会的実践として見なすことで、新メディアにおける知識の生産と力関係の形付けにいかなる役割を果たすのかを観察することが可能となる。同様に、公的なやり取りの場において常識に関する談話を観察することで、その談話が参加者の行動をどうコントロールするのかを明らかにすることができる。常識がこれほど顕著に取り上げられることから、近年において、問題として主張されてきた「常識の欠如」が決して妥当ではないことが分かり、むしろ「常識」へのアピールが、現在も日本社会の談話において重要な役割を果たしていることが明確である。

常識とは何か?

常識ということばはしばしば会話に出るが、その意味が問われることは意外に少ない。広義な意味に限定すれば、常識とは「時空間の経過に左右されず、すべての人間が持っているもの」とされている(Rosenfeld, 2014, p.1)。日本語においては、「一般人の持つ考え」という意味で用いられた「常識」の最古例は1707年となっているが、今日でいう「社会人として当然持っている」知識という意味で用いられたものとして、日本国語大辞典に収録されている最古例は1881年であり、英語の *common sense* の訳語として導入されたのである(小学館国語辞典編集部, 2007a)。反対語の「非常識」は、その約35年後の1905年~1906年に出版された夏目漱石の『吾輩は猫である』の一文が最古例となっ

ている(小学館国語辞典編集部, 2007b)。英語と比べ、日本語でいう「常識」はどちらかという共通の知識や価値観を指しており、発言小町への投稿の「[[おおらか]は非常識となった」(ふー, 2017)という件名に示されているように、規範的な態度も含まれる。「常識」で価値観やマナーも指されることがあり、ことに後者に関しては、「非常識」がかかっている。

常識が重要な概念である理由は、イデオロギーと関係しているからである。言語的イデオロギーの概説で、Hill (2008) が「(言語的イデオロギーが) 常識という形で表象され、テキストや会話の形式や機能を正当化する言語に関する利害関係のある位置付け」(pp.33-34) だという。この説明からも分かるように、常識という概念が力強いのは、裏に真理が隠れているからではなく、常識という概念が操りやすいからである。むしろ、「(常識とされているものが)「常識」なのは、正しいあるいは有り得るからではなく、(常識で表象されていることを) 信じることで、利益が得られる集団が形成されるからである」(Hill, 2008, p.34)。さらに、イデオロギーが、集団の利益の主張に活用されるときに、スタンス取り、つまり「ある事柄が好ましい・好ましくない、よい・悪いとして評価する」(Jaworski & Thurlow, 2009, p.219) こととかかっている。スタンス取りが、事象を通して評価を曖昧にすることとかかっている(Jaworski & Thurlow, 2009) が、その目的が、ある事柄を常識として主張することで達成できる。反対に、他者のことを「非常識」と呼ぶことにより、自分が常識側に立っていることを含意し、同様にスタンスを示すことになる(図1)。いずれの場合でも、スタンスを示すことは基本的に対話的な活動であり、相手にもスタンスを示すように促進することにつながっている(Coupland & Coupland, 2009)。

社会科学が常識に対して批判的な捉え方をしてきたが(c.f., Rosenfeld, 2014)、本論では「常識」を、現象の見られ方を左右する社会的イデオロギーに基づくレトリックのツールとして捉えていく。よって、常識が

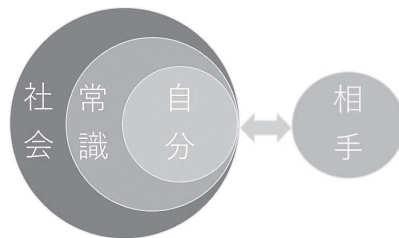


図1: 他者を「非常識」と呼ぶときのスタンスと個人の位置付け

人や場、時代によって変わることがあり、「常識として捉えられるものは、当時でも完全に同意されるわけではない」(Rosenfeld, 2014, p.15) ということ、前提として受け止める。こうして解釈すれば、常識が個々の位置付けの交渉に用いられる恣意的なものとして捉えられる。

常識があるコミュニティの全員によって共有されるはずだからこそ、常識に訴えることが「ある社会的行動を認定・許可する過程」(Reyes, 2011, p.782) だという正当化に働きかける。正当化を試みる際、様々なストラテジーが用いられるが、Reyes (2011) が、感情の喚起による正当化・仮定的将来の喚起による正当化・理性の喚起による正当化・専門家の声の喚起による正当化・利他主義の喚起による正当化という5つのストラテジーを提唱した。この中で、常識への訴えが理性による正当化として捉えられる。理性による正当化は、「行為者が、事柄がゆっくりと、考慮された思考的過程を経て決定されたように」提示する正当化である。一見すると、「常識」は「ゆっくりと考慮された」思考とは無関係のようである。たしかに、常識は習慣的に分析されずに受け止められ、論理的思考の代表だという科学との対として提示されることが多い (Millstone, 2012)。

しかし、常識は理性とかかわっていることが重点である。すなわち、「理性のある人が、現実的に考えており、実用目的のために十分に考える能力があるという信念」とかかわっているため、理性は「常識的判断力」の一部を成している (Durant, 2010, p.140)。換言すれば、常識が理性の一部を成しているのは、「正当化のストラテジーは、社会として特定の価値観や世界観を共有しているからこそ効果的」(Reyes, 2011, p.787) であると同様に、共有的・未分析だからである。実際に、理性による正当化と道徳的評価による正当化が重複することもあるという (Fairclough, 2003, p.99)。多くのやり取りにおいて集団の成員には類似の価値観を共有していることが事実同然として捉えられる、いや、事実として捉えないとやり取りが行えないのである。その結果として、常識を「中断」することが困難である (Hill, 2008, p.180)。また、常識に対する訴えを否定するために、集団の全成員が同様な信念を持っていると主張せねばならず、他者にスタンスを示されることになる。最終的に、同様な攻撃を受ける可能性が高い。

電子コミュニケーションにおける正当化と発言小町

常識への訴えが、インターネットを通じた電子コミュニケーションにおいて重要な正当化ストラテジーだと考えられる。近年の新資本主義の登場のように、

イデオロギーにおける変化が生じる際に、新しい動きを説明して変化の正当化に行うことが重要な問題となり、常に正当化が行われている (Fairclough, 2003, p.88)。何が常識なのかという解釈が共有されていないと通用しないため、常識への訴えを成功させるために、集団の他成員からの賛同を得る必要がある。つまり、多くの人によって許容される必要があるともいえるが、多数不特定の利用者がいるインターネット上のコミュニティが、そうして多数決による判断を行うのに有効である。実際に、発言小町において「常識」が一つのキーワードとなっている。2017年12月13日現在、本文に「(非) 常識」が含まれている投稿が68,612にも達しており、約全547,637件の投稿の8%弱に現れている³⁾。

1999年に設立された読売新聞の「大手小町」というサイトの一部として運営されている発言小町は、すでに2011年までに1日1千件の投稿が寄せられるようになり、月間アクセス数は1億5千万ページビュー、またユニークユーザー、つまり重複を除いた訪問者数が約300万人に達しており、大手小町の利用者間交流の場として機能している (稲沢, 2011)。仕組みとして、そのサイトは半管理型のQ & A形式のコミュニティサイト (Harper, Raban, Rafaeli, & Konstan, 2008) であり、基本的に投稿は、投稿者が自分に抱えている問題に関するアドバイスを求めるという形を取る。具体的に、問題に遭った投稿者 (発言小町でいう「トピ主」) が、その詳細を一つの独立したページとして投稿する。それを読んだ他利用者が、2つの方法により反応できる。一つ目は、ボタン1つ押すことによる簡易評価である (図2)。二つ目は、該当のページに残される返信 (発言小町でいう「レス」) である。同列に上げられることが多いYahoo!知恵袋と比べ、発言小町は、(1) 読売新聞によって運営されているため、権威的だといえ、(2) アドバイスを求めることが中心的な活動である。他の電子掲示板と異なり、発言小町を利用するのにメールアドレスとハンドルネームを決めるだけで投稿することができ、すべての投稿が掲載される前に誹謗中傷や個人を特定する情報がないよう、編集部によって確認されることが特徴的である (稲沢, 2011)。



図2：発言小町におけるワンボタン投票評価 (スクリーンショット)

このように、発言小町はインターネットに慣れていない、あるいは電子掲示板に対してよくないイメージ

を抱えている人にとっても、「安心してご利用いただける」(稲沢, 2011, p.156) ことが特徴的だが、従来のメディアとも明確な関係を持っていることは、利用のハードルを下げていると考えられる。ことに新聞におけるアドバイスコラムを継承していることを鑑みて、発言小町は新しいテクノロジーを旧来の目的・方法に用いられる傾向の典型例であり (Winston, 1998)、メディアのドメスティケーション (家庭内化: Berker, Hartmann, Punie, & Ward, 2005)、つまりメディアが生活の一部になっていく過程の表象でもある。しかし、新聞と比べ、投稿内でユーザー名を追跡することができるが故に、発言小町は対話的であり、相互行為の場でもある。そのため、発言小町は一つのコミュニティを成していると考えられるが、当時大手小町の元編集長・稲沢裕子 (2009, p.245) が語るように、「発言小町はバーチャルな世界です。けれど、ここに来れば、誰かが自分の思いを受け止めてくれる。…共感の確かな手応えがある。そんな瞬間に出会えるのが、発言小町の魅力」なのである。

発言小町が匿名なコミュニティが故に、正当化が非常に重要な交渉過程である。匿名性は徹底されており、利用者規則により個人を特定する情報を入れることが禁止されている。この匿名性こそが、インターネットでアドバイスを要求する理由になることが多いと、稲沢 (2009, 2011) にも指摘されている。物理的・心理的な距離が大きい故に、葛藤を取り上げることにリスクが伴う親族や友人への打ち明けよりも、自らの問題を発言小町で打ち明けた方が安易なことも予想される。また、匿名な場で、論争をかもし意見が、主張しやすくなることもある。例として、Hill (2008) が、米国アリゾナ州のとある山の改名に関する新聞の投書欄および電子掲示板への匿名投稿を比較した結果が挙げられる。山の名前が元々 Squaw Peak というネイティブ・アメリカンの女性に対する差別的な名前だったため、Piestewa Peak に改名することになった。このとき、新聞記事は一般的に改名に対して支持的だったのに対し、匿名な投稿はどちらかという批判的であった。これを受け、Hill (2008, p.70) は、改名に反対の人は差別的だと言われることを恐れ、意見を主張する場として匿名な電子掲示板が心地がよいと感じている、と解釈した。

とはいえ、電子掲示板では何でも書いてもよいというわけではない。名前からも分かるように、発言小町は一種のコミュニティであり、話し合う場として位置付けられている。発言小町の利用者が、互いのことを「小町の皆 (さん/さま)」とも呼び、一つの集団と見なしている (例 2、例 3)。論争的となることが多い、同電子掲示板の 2ちゃんねると比べ (井上, 秋月,

& 荻野, 2007, pp.112-114)、投稿が、真実ではない「つり」かどうかという、投稿の心理に関する議論が少ないのは、発言小町が規範的な行動への認識が共有されているコミュニティだからこその特徴だといえよう。それと同時に、発言小町は電子掲示板ではあるが、実生活への浸透も見られる。他者に相談した内容を見せるつもりだと開示する投稿も見られる他、読売新聞にも投稿が抜粋されることもあり、積極的な利用者以外にも、発言小町のやり取りが届いている (例 4)。上記のことを踏まえ、発言小町におけるやり取りが、実生活におけるやり取りと比べ安全で隔離されていると同時に、浸透性が深いともいえよう。その結果として、匿名性により利用者が自由に意見を書き込めるが、コミュニティ規範からの逸脱により支持を失せる恐れがあり、積極的に自らの主張の正当性を主張する必要があるであろう。

例 2 : 小町の皆さんならこういう場合、どうするのがベストとお考えでしょうか? (塞翁が馬, 2017)

例 3 : 小町の皆様は色々な事を知ってる方が多いので、誰か解る人居ませんか? (momoママ, 2017)

例 4 : 皆さま、父へどう言ったらいいでしょう。/ アドヴァイスをいただけませんか? / 場合によっては、父にこのトピを見せようと思っています。(しまねこ, 2011)

発言小町における浸透性は「(非) 常識」への訴えが効果的原因だとも考えられる。そもそも電子メディアにおけるコメントは、互いの位置付けを明らかにしてスタンスを必ず示すものだが (Barton & Lee, 2013)、通常、同集団内のコミュニケーションは、文化的伝統に対する共有知識を基にしている。その結果として、同意されている伝統に対する認識の普及に貢献しており (Zou ほか, 2009, p.281)、さらにその認識が、常識的信念の基盤になる。コミュニティをなす以上、発言小町では互いに共有されている常識が機能しているはずで、その常識が、主張の正当化をするための資源にもなれるのである。だが、発言小町は明確な性質のあるコミュニティではない。その表象として、複数の立場から同じ話題を問題視する投稿が、短い期間内に連続的に出現することがある。

その一例は、2017年の2月冒頭に出現した保育園への入園と抽選 (いわゆる保育園待機児童問題) に関する投稿群である。2017年2月5日に、経済的に不安で

保育園に子どもを送らないといけない人が、なぜ子どもを作ったのかを疑問として提示したトトロ（2017）の投稿の後、2日後の7日に子どもが保育園に入れなかったから仕事ができないと嘆きこなつつ（2017）が出現し、さらに12日に、保育園の問題で仕事をやめられないといけないことは、つまり計画性に欠いているのではないかという投稿も見られた（育休取得中、2017）。短時間内に、これだけ異なる立場の投稿が集中的に出現したのは、偶然ではなく、保育園の抽選発表とかかわっていることが予想できる。しかし、ほぼ真逆な主張もされていることから分かるように、発言小町の利用者が全員類似した経済的・社会的背景を共有している前提が否められる。多様な利用者がいるからこそ、「(非)常識」が行動や信念の正当化を行うために主張される一方で、そういった主張が議論されずに済むほどの統一性に欠いている。その結果として、「(非)常識」への主張がいかに戦略的に機能するか、またそういったやり取りにおいて、利用者の交渉によって「(非)常識」という概念への意識がいかに変わるのかを考察するのに最適な資源である。ソーシャル・ネットワークワーキング・サービスや電子掲示板が変容的空間(transformative spaces)として機能することがあるが(Barton & Lee, 2013, p.131)、その変化は価値観にも見られるであろう。

方法

上記のことを踏まえ、「(非)常識」への訴えが発言小町においてストラテジーとしていかに機能するのか、またその交渉を経て常識という概念に対する認識がいかに変わるのかを明らかにすべく、本研究では複数の投稿の詳細な談話分析を行う。それにあたり、2016年1月1日からの一年間分の投稿を対象に、「(非)常識」が件名に入っている投稿を抽出した。「(非)常識」が件名に含まれている投稿に限定したのは、本文に「(非)常識」が含まれている投稿をすべて抽出すると多量になるため、合理的に考えては非現実的だからである。

また、「(非)常識」を件名に入れることで、「(非)常識」がフレームとして機能し、投稿の主たる論点の一つになるため、他利用者に積極的に「(非)常識」という問題を取り上げるように促進すると考えられる。

その結果、「(非)常識」が件名に入っている投稿が60件抽出された。さらに、「(非)常識」が誰の行動や信念について利用されていたのか(トピ主、他者、トピ主と他者の両者、一般的な事柄、その他)、またいかなる用法であったのか(質問文:「～常識ですか?」、形容詞的:「非常識な～」、名詞的:「常識は～」)によって抽出された投稿を分類した(表1)。抽出された投稿の大半には「常識」(35.00%)ではなく、「非常識」(63.33%)が現れた。また、「非常識」は主に質問文に使われた(55.26%)のに対し、「常識」が質問文(42.86%)の他に、主に名詞的な用法で多く用いられた(38.10%)が、これは文法的な特徴による差であろう。

次に全60件の投稿の返信数が確認された(表2)。「常識」が件名に入っている投稿に対する平均的返信数は66.25件($SD=80.97$)となり、トピ主による追加返信は1.10件($SD=1.12$)となった。「非常識」が件名に入っている投稿に対する平均的返信数は比較的高く(106.47件、 $SD=140.65$)、トピ主による追加返信の平均も比較的高かった2.03件、 $SD=2.78$)。トピ主による追加返信と他利用者による返信には弱い相関が見られ($R=.2224, p=.0905$)、追加返信があったほうが、投稿の内容がより豊富になり、他利用者が反応するようにひかれる可能性が高くなることが予想できる。なお、本研究の目的は「(非)常識」への訴えで始まる交渉を観察することにあるため、より多くのやり取りが見られるトピ主による追加返信のある投稿に限定する。

最終的に、トピ主による追加返信のあった39件のうち4件を対象として選定した。選定にあたり、行動が常識的かどうかの認定を要求する投稿が対象として除外された。それは、問題の行動や信念が適切と自ら主張するよりも、相手に判断をゆだねるという点で「(非)

表1：件名に「(非)常識」が現れた投稿の件数(2016年1月～2016年12月)

対象者	常識					非常識					両者		総計										
	質問	形容詞的	名詞的	その他	合計	質問	形容詞的	その他	合計	質問	合計												
トピ主	3	60.00%	-	-	2	40.00%	5	20.00%	15	78.95%	3	15.79%	1	5.26%	19	76.00%	1	100.00%	1	4.00%	25		
他者	5	50.00%	2	20.00%	3	30.00%	-	10	37.04%	4	23.53%	11	64.71%	2	11.76%	17	62.96%	-	-	-	27		
両者	1	100.00%	-	-	-	-	1	50.00%	1	100.00%	-	-	-	1	50.00%	-	-	-	-	-	2		
その他	-	-	-	-	-	-	-	-	1	100.00%	-	-	-	1	100.00%	-	-	-	-	-	1		
一般的	-	-	-	5	100.00%	-	5	100.00%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5		
総計	9	42.86%	2	9.52%	8	38.10%	2	9.52%	21	35.00%	21	55.26%	14	36.84%	3	7.89%	38	63.33%	1	100.00%	1	1.67%	60
					100.00%																		

表2: 「(非) 常識」が件名に入っている投稿に対するトピ主と他利用者による返信の件数

キーワード	利用者	返信件数											M	SD		
		0	1~50	51~100	101~150	151~200	201~250	251~300	301~350	351~400	400~450	451~500			削除	
常識	トピ主	9	12												1.10	1.12
	他利用者		11	5	1	1	1	1	1						66.25	89.07
非常識	トピ主	15	22										1		2.03	2.78
	他利用者		19	8	2	2			1	3			2	1	106.47	140.65
両方	トピ主		1												1.00	-
	他利用者			1											58.00	-

常識」への訴えによる正当化には入らないと考えられるためである。なお、トピ主自身の行動に関する投稿が主に質問文を成しているため、「(非) 常識」が他者の行動や信念を取り上げる際により有効であることが示されている。最終的に、「常識」「非常識」が件名に入った投稿を2ずつ(合計4つ)選定した(表3)。可能な限り、利用者との対話的なやり取りが活発だったという意味で「成功した」(c.f., Nishimura, 2008)という理由より、同分類内でトピ主による返信が最も多い投稿を対象にしたが、同数の場合、より総合的な分析が実施できるよう、正当化が行われる状況も考慮した。具体的に、各投稿に対する返信を、肯定的(トピ主を支持する)または否定的(トピ主を支持しない)・部分的(批判的な要因と支持的な要因がどちらも見られる)・

その他(他の事柄に触れる)ものに分類し、その結果を参考にしながら概ね肯定的な投稿を2件、部分的・否定的な投稿をそれぞれ1件ずつ選抜した(表4)。

結果

全体的に投稿1と投稿2においてはトピ主の主張が概ね支持されたのに対し、投稿3と投稿4においてはトピ主に対する批判または部分的にとどまる支持が見られた。この傾向が、トピ主が自らの行動や信念に対する正当化を実施するのに用いたストラテジーに影響をもたらし、ことに投稿3と投稿4に関しては、批判的な返信を受け、トピ主が改めて交渉の方向性を変更させようとする動きが見られた。これを受け、下記では「(非) 常識」への主張が、トピ主と他利用者の正当

表3: 対象の投稿

番号	投稿題名	トピ主名	投稿日付	キーワード	用法	返信件数	
						トピ主	他利用者
1	店内を走り回り続ける子供達。親は知らんぷり。常識持って!	ふくろう	2016年12月22日 (15:07)	常識	名詞的	1	29
2	非常識な義弟夫婦とのつきあい方	ねこ	2016年9月13日 (2:21)	非常識	形容詞的	8	32
3	「あなたの常識に任せます」と言われました。	イチゴケーキ	2016年12月9日 (15:57)	常識	質問	2	167
4	非常識な義兄たちの披露宴に欠席する場合の祝い方がわかりません	まよまよ	2016年4月14日 (11:23)	非常識	形容詞的	5	76

表4: 各投稿に対する返信の分類

投稿番号	返信の傾向					合計	(非) 常識の出現件数	
	肯定的	否定的	部分的	その他	トピ主返信		他利用者	トピ主
1	23	0	5	0	1	29	10	1
2	19	2	3	0	8	32	3	1
3	139	3	19	4	2	167	105	2
4	18	41	9	3	5	76	88	3

化を支持するのみならず、その正当化を否定するためにいかに用いられるのかを考察していき、ことに投稿3と投稿4のように、「(非)常識」への訴えが論争の的となるとき、「(非)常識」という単語が返信においても繰り返して出現する傾向があることを指摘する。なお、各投稿の詳細(投稿日付、返信数)については表3を参照されたい。また、トピ主による最初の投稿およびそれに対する返信が、インターネット上では一つのページとして表示されるが、分析において提示される日付は、返信が追加された日付である。

投稿1：常識を所有することと共有する驚愕

最初の投稿は、トピ主のふくろう(2016)が見た経験談をまとめたものである。先日、トピ主がモールに行ったときに、小さな子どもが親の監督なしに店の中を走り回っていたという内容であったが、トピ主のふくろうの投稿の特徴の一つは、「どう思いますか」という、閲覧者への問いかけがなかったことにある。その代わりに、当投稿は主にトピ主のふくろうの驚愕を表現するためになっているとともに、規範的な行動への促進としても機能している。この驚愕感、件名における「常識持つて！」ということばから明らかであるが、後日に投稿した追加返信では、トピ主のふくろうは類似した逸話の多さに対する驚愕を改めて述べ、そういった問題が「日常化」しているという(例5)。ことに例5の最後に現れる「ね」に注目すべきである。「ね」は、話し手と聞き手が同じ情報を持っていると想定する場合に用いられる(廣瀬&長谷川, 2010)。さらに、コミュニティの円滑な維持にも貢献するため(Nishimura, 2008)、「ね」を用いることにより、問題行動が「日常化」していることに対する批判的な評価(「～しちゃっている」)への共感を促進していると解釈できる。このことは、自身の直接引用として提示されている感情表現(「えーっ！そんな人もいるの？と。」(太字は筆者による))によって強調される。

例5：皆様のレスを拝見して、私もビックリしました。／えーっ！そんな人もいるの？と。／それにほとんどの方が『よくいるよ』って。／そうなんです。日常化しちゃってるんですね～(ふくろう, 2016年12月25日)

トピ主のふくろうが「常識」という単語を用いたのは、件名に現れた1回のみだが、その用法がことに有力であった。名詞として使われた以上、「持つ」ものとして提示することができ、含意的に人々を「持っている人」と「持っていない人」の二派に分かることになる。その結果として、持っていない人に対し「持つよ

うにする」という命令(件名における「持つて！」)も可能となるが、命令ができる以上、対象者が悪質に意図的に持っていないという解釈が促される。いうまでもなく、通常ならばフェイス侵害行為(Brown & Levinson, 1987)になるため、命令が避けられることが多く、この用法が非常に有標である。こうして問題視している親が、意図的にあえて理性に反していることをしているように描写することにより、トピ主のふくろうが親の行動が不正なものとして提示することに成功すると同時に、自分の考えを「理性的構成」(*rational construction*: Reyes, 2011, p.798)、つまり常識として正当化することができる。

28件の返信に対し、「(非)常識」は9回のみ(約3件の返信おきに1回)出現した。そのうち、23件が対象の親の行動を否定的に評価したため、トピ主のふくろうが概ね支持されたといえるが、その結果として件名の「常識」に対する違和感が覚えられず、議論する必要がとりわけ感じられなかった可能性がある。「(非)常識」が現れた例の多くは、「常識」が例6のようなトピ主の用法と同様に、名詞として用いられている。談話を通して同一単語や表現が繰り返して用いることが、対人関係を強化するのに有効とされているが(Tannen, 2007)、ここでも、トピ主のふくろうと同様な用法で「(非)常識」を用いることにより、他利用者が「常識を持つ人々」の一員として自らの位置付けを固めていると解釈できる。

例6：五月蠅いおばさんと結構、親が怒らないんだから誰か言わないと／のびのび育てることと、常識を守らないことは違うから。(non, 2016年12月23日)

投稿2：他人が「非常識」であることが、個人へもたらす影響

投稿1と同様に、投稿2(2016年9月13日)の主張は概ね支持された結果として、「(非)常識」が返信においてさほど出現しないことが特徴的である。既婚者で夫の家族と同居中のトピ主のねこ(2016)が、義父が夫の弟(義弟)をトピ主のねこが開催するイベントに頻繁に誘うが、外食に行く際でも、かかった費用に対して義弟家族が毎回お金をまったく出さない。このことを受け、トピ主のねこが、今後自分が開催するイベントに義弟を誘わないように依頼することが社会的に認められるのかを確認するために投稿をした。トピ主のねこでも、自らの行動を「ひどい」と評価することで、自分の行動に対する疑問を表すが(例7)、一方で自分の行動を正当化していることが窺える。

例7：正月もこの調子だったら招きたくないのですがそんな事を提案するのは実家ですしひどいのですか？（ねこ、2016年9月13日）

トピ主のねこによる正当化は、件名で義弟夫婦を「非常識」と呼ぶことから始まる。投稿1と比べ、名詞（義弟夫婦）を修飾する形容詞として「非常識」を用いることで、相手の行動を問題視しつつ「常識」を中心的な問題にせず済む。トピ主のねこが自らの追加返信で「(非)常識」を用いないことで、他利用者は明らかに義弟夫婦の常識が中心的な問題と分かり、社会的な規範からの逸脱が故に誘わない方向にもっていけるよう、トピ主のねこの主張を支持するように促される。例8では、共感の対象として自分が唯一出来る人として自ら位置付けを試み、ことに事実として断言するのではなく、「思います」で理性的な思考の結果として提示することにより、Reyes (2011) がいう理性的でよく検討された手順を踏んでいる。例9では、義弟夫婦の行動が自分自身にどのような影響をもたらすのかを明らかにするが、無標の「嫌な気分になる」のではなく、「させられる」という使役の受動態を用いることで、相手の行動が原因（使役で表現）だと示しながらも、自分の支配できることではない（受動態で表現）ことを強調することに成功する。同様に、例10では無標の「できません」の代わりに「なりません」で、自分の限界にきていることを表現することにより、トピ主のねこは行動の必要性をさらに強調している。

例8：義父も夫も甘いので、はっきり私が言わないと分からないと思います。（ねこ、2016年9月13日）

例9：義弟嫁は食事に来て態度が悪くみんな気を使い、お金や手間をこちらがかけ、毎回嫌な気分させられるだけです。（ねこ、2016年9月13日）

例10：毎年何も負担せず用意も手伝わずに食事をし、余ったおかずを持って帰る姿を見るとイライラして我慢なりません。（ねこ、2016年9月13日）

投稿1と同様に、投稿2に対する返信のほとんどがトピ主の主張を支持した（24件中21件）。トピ主を支持しなかった返信の3件でも、全体的にトピ主の気持ちを否定したのではなく、金銭的な問題に焦点を当てる傾向が見られた（例11）。その結果か、「(非)常識」が全返信に2回のみ出現した（例12、例13）。どちらの返

信においても、「(非)常識」がトピ主のねこを支持するために用いられており、投稿1でも見られたように、キーワードの繰り返しで同情的な共感を作り出していると解釈できる。このことより、トピ主のスタンスを正当化する試みが成功できたといえよう。

例11：正月の料理代金を請求するって聞いたことないです／祖母たちにお礼をするのは強制なんですか？／招待されたから行っただけだと思いますけど（匿名希望、2016年9月13日）

例12：トピ主さん負けないでね！／常識外れの義理弟夫婦へは情けは不要です！（mimo、2016年9月13日）

例13：非常識な一家なので、あなた達夫婦と義父、祖母だけの／食事の時だけ惜しみなく御馳走を食べましょうね。／応援しています（点子、2016年9月14日）

投稿3：距離と常識に対する疑問

投稿3は投稿1と投稿2とは異なり、戦略的に「常識」への訴えることが裏目に出る事例である。トピ主のイチゴケーキ（2016）の新しい職場では、同僚が習慣的に大幅なサービス残業をしており、トピ主のイチゴケーキにもそれを要求していることが相談の内容である。しかし、このことは「あなたの常識に任せます」と言われました。」という件名からは読めとれない。件名では、「常識」が引用の一部として出現するが、その対象が不明であるがために、原文での続きへ読み手の関心を引き寄せるものとして機能する。原文で明かされるように、サービス残業の件を上司に相談したときに、「ここはあなたの常識に任せますから自分で判断して下さい」と言われたことが、投稿のきっかけとなった。

原文におけるこの上司のことばからの引用だった「常識」が、件名に次ぐ2つ目の出現であり、同じ文の引用である件名と重複している。直接引用がReyes (2011) のいう権威的な専門家の声（voice of expertise）として機能することもあるが、ここでその反対の目的を果たすために機能する。自分のことばではないということ強調することにより、トピ主のイチゴケーキが上司の主張に対する疑問を示唆し、自分のスタンスを暗に示す。投稿の最後の文（例14）で、トピ主のスタンスがさらに示される。少なくとも今までの経験では「普通」とは認識していないことが明確になり、「常識」を問題視していることが読み取れる。

例14：調理場にお勤めの方々これは普通の事ですか？

165件の返信中139件が、この状況が普通ではないと主張し、投稿者に賛同した。最初の返信をはじめに、例外もあったのだが、それが流を作り出したのではなく、むしろ最初の返信者のこんぶだしが批判される結果となった(例15)。なお、「¥」は件名と本文の境界を示す。

例15：こんぶだしさんへ¥あなた本気で言ってるんですか。／2～3時間前から仕事の準備して読んだ上で言ってるんですか。／仕込みも当然勤務時間内でしょう。(猫、2016年12月12)

トピ主のイチゴケーキの上司が「常識」を戦略的に使っていることに気付いた返信者が多く、返信の中で積極的に「常識」という単語を用いた。「常識」は165件の返信において103回(1.6件おきに1回)出現し、中心的な用法が3つ見られた。第一は、「常識」への訴えが搾取的であることに気付き、その点にまっとうから触れたものである。例16はその一例だが、返信者のはるひは、その発言を「逃げ」、つまりサービス残業への要求という本心で言いたいことを言わずに暗に指す言い方であったと指摘する。第二は、反論するように勧めたものもあった。例17では、返信者の男ですが、解釈し直すことで「常識」のフレーミング直し(reframing)という、指されている事柄の意味付けを変更すること(Tannen, 2006, p.601)で抵抗するように提案する。すなわち、上司が常識に従うことを個人の選択とし、道徳的に当然すべきものとして提示するのに対し、法的権利に話題を移行するように勧められる。第三は、例18のように、個人のものとして「常識」を提示する返信である。通常ならば、無標の用法で「私の」という人称代名詞の利用が避けられる傾向があるが、自分の常識だとあえて主張することにより、発話者自身とは異なる「常識」の可能性も認められる。

例16：常識に任せますという上司の言い方は逃げです。(はるひ、2016年12月9日)

例17：他の人になんか言われたら「常識で判断しろ」と言われました。それで常識で判断しました。日本は法治国家だと思っています。」と言えばよろしい。(男です、2016年12月9日)

例18：私の常識では¥サービス残業も30分程度のものは容認しますが、／2、3時間にも及ぶモノ

は容認できません。(ぺんぎん、2016年12月9日)

トピ主に対する支持率が高かったからか、「普通」を確認することを疑問視する返信(例19)も見られ、追加返信でトピ主のイチゴケーキ自身も曖昧な態度を示しながら、アドバイスをどう生かすのかを明確にしなかった(例20)。ある行動や信念が「常識」や「普通」なのかという確認自体が、実際の対応に賛同的であっても批判の対象になることもあり、トピ主のイチゴケーキがそのスタンスから距離を置こうとしていると解釈できる。一方で、賛同しなかった最初の返信者のこんぶだしが、その他の反応を受け、例21のように自らの位置付けを変えている。「よね」の用法で、相手のスタンスに自分を合わせることで共感を表しているが、批判的な情報を受けるときに起きる同調の典型例である。返信者のこんぶだしの追加返信は、常識の対話性の表象だともいえる。すなわち、常識という概念の範囲・規模が人によって異なることがあるが、ある程度合意が求められるため、「常識」への主張による正当化が難航することがある。

例19：ところで、ここで「調理場ならこれは普通」という回答が多ければ／納得して働けるのですか？(kuma、2016年12月9日)

例20：何故ここで聞くの？とありましたが普通ではないと言う回答が多かった場合も普通と言う回答にも私一人ではどうしようもありません。私が辞めれば済む事ですから…(イチゴケーキ、2016年12月13日)

例21：[...] サービス残業するのは至極当たり前だと思っていましたし、私自身、そのようにしていますので、きついレスになってしまいました。／しかし、2～3時間も前から仕事を始めるのは確かにオカシイですよ。(こんぶだし、2016年12月17日)

投稿4：ストラテジーが不成立時に生じる再交渉

投稿4は、他者に支持されないスタンスを示すときに起こる交渉の事例である。トピ主のまよまよ(2016)の義弟が、前から準備してきた娘の発表会と同一日に結婚式を挙げることにしたが、そのことによりトピ主夫婦は結婚式への出席が不可能となった。このことを受け、トピ主のまよまよが、どう祝えば適切なのかを相談したのである。例22からも分かるように、トピ主自身が、結婚式に出席すべきだと意識しているが、「常

識的ではないのだな、とは思いますが」ということばからも分かるように、相手のことを否定的に評価しながら自分自身が負担をかけられていることを強調している。このことにより、トピ主のまよまよには非がないことを示し、正当化を試みている。「～と思うのですが」の用法で、単なる事実として批判しているのではなく、相手の期待に応えられなくても、理性的な思考の結果として提示することも正当化に機能している。

例22: あまり常識的な人達ではないのだな、とは思いますが、／こちらが義理を欠くのは嫌なのです。(まよまよ、2016年4月14日)

同様に、例23では欠席が「失礼」だと否定的に評価するが、直接説明されていないことを理由として自分の行動が正しいと主張している。受動態(「知らされました」)で、自分を行為者として外している結果として、結婚式への欠席をコントロール外の事柄として位置付け、責任の所在が自分にはないことを強調している。一方で、例24では「世間知らずの」夫よりも常識がある人として自分を位置付けることにより、本来ならば自分の親戚だから自分で話すべきだという夫を「専門家の声」(Reyes, 2011) から外し、トピ主が自らやるしかないことを示唆している。

例23: 本来でしたら欠席する失礼を幾重にも頭を下げたくて／「結婚を心から祝福しています」／ということが伝わるような祝い方をすべきだとは思いますが、／義兄本人からは入籍や結婚の報告が全く無いまま、／義母経由で入籍した旨知らされました。(まよまよ、2016年4月14日)

例24: (ちなみに夫は理系の研究職で世間知らずな為、こういった相談相手にはなれません…。)(まよまよ、2016年4月14日)

しかし、トピ主のまよまよの正当化のストラテジーが成功しなかった。71件の返信中、41件(57.78%)が否定的であった。そのせいか、投稿1～投稿3と比べ、「(非)常識」が全85回(1件に対し1回強)で頻繁に現れた。投稿3の上司のことばと同様に、トピ主のまよまよの「非常識」への訴えがストラテジーであることが他利用者に見抜かれた。例25では、返信者のすみれがトピ主のまよまよのことばを返し、「非常識のレッテル」が貼られることを指摘したが、「貼られる」ものとして提示することで、本質的なものではなく、トピ主のまよまよ自身がやろうとしたように与えられ

るものとして解釈の再調整を行った。さらに、投稿3のように「非常識」を引用として使うことによりトピ主のまよまよの正当化ストラテジーから距離を置いた(例26)。

例25: 娘のお稽古の発表会で、披露宴に欠席するって、そりゃ非常識のレッテルを貼られても仕方ないよ(すみれ、2016年4月14日)

例26: だとすれば、トピ主さんが「非常識」とまでこき下ろすことはないのでは?(四季、2016年4月17日)

上記の批判を受け、トピ主のまよまよがまた自分に対して「非常識」を用い、批判を受け止める(例27)。共通の価値観の持ち主として自らを位置付けることにより、他利用者に位置合わせることを試みている(Jaworski & Thurlow, 2009)。しかし、トピ主のまよまよが正当化を諦めたわけではない。事態が「こじれてしまっている」と表現することで、また自らのことを行為者から外し、「かえって失礼になってしまう」と表現することで、マナーを意識しながら自分が受身的な存在として呈することで、意図的に非常識な行動を取っているのではないことを強調している。ここでも、断定を避け、「思います」と表現することで、自らの理性を訴える。結果的に、自分が義理の深い被害者として位置付けようとしている。

例27: 披露宴を欠席するほうが非常識なのは、本当にその通りだと思います。／万難を排して出席!／が筋だと思うのですが、既にその辺からこじれてしまっているのです。／[…]／今となっては招待もされていないため、今更出席したい旨伝えることは、かえって失礼になってしまうと思います。(まよまよ、2016年4月16日)

相手を「非常識」と呼ぶストラテジーが不成立で終わったため、コミュニティを妨害しないように、トピ主のまよまよがこうして自身の持っている「(非)常識」という概念を見直させられた。最終的に、自分のスタンスが正しいという支持への要求を中断し、同情が必要な無力な被害者として位置付けを直そうとし、最後の追加返信で義弟夫婦の結婚式が中止になったことを報告するとともに、「愚痴らせてください」と書いた。

考 察

上記の結果から読み取れるように、「(非)常識」へ訴えることが、問題視されている行動や信念を正当化するのに有効だが、必ずしも戦略として成功するとは限らない。事例として挙げた4件の投稿のどちらにおいても、「(非)常識」への訴えにより自分のことを理性的な人として、あるいは場合によって他者を非理性的な人として提示するのに機能し、Reyes (2011) の提唱した枠組みで解釈することができる。一方で、「(非)常識」への訴えは、その一言だけで戦略として機能したのではなく、専門家の声を借りた例からも見られたように、他の戦略への貢献を受け成立した。同時に、「(非)常識」への訴えが成功するとき、投稿1や投稿2のように、その訴え自体が正当化戦略として機能しているという認識がないこともある。反対に、「(非)常識」への訴えによって主張されている事柄に対する賛同が得られない場合、その用法自体が顕著な議論点となる。「常識」というものが、社会から取り除いて本質的に存在する実体がなく、コミュニティに属する他構成員によっても支持される必要があるからこそ、人によって異なることもあるというメタ言語的な知識が示されている(投稿3)。結果的に、支持が得られず、「(非)常識」への訴えが不成立する場合、訴えた側に対する疑問が同様に「(非)常識」という単語が当てられることもある(投稿4)。「常識」たるものが分析されないのに対し、そうではないことが顕著になる傾向がある(石井, 2001)が、この点が、賛同が得られる「常識」が問題視されず、得られないと議論的になることによって反映されているであろう。

これにより、「(非)常識」への訴えを通して正当化を試みることの根本的な矛盾が示されている。すなわち、投稿2で見られた返信者のこんぶだしの変化を例に、ある行動が非常識だという訴えを否定することで、すべての人が同一意見ではないことが認められるが、「常識」が別に存在するという訴えになるからこそ、合意を得ることが可能だという見方も示唆される。Durant (2010, p.21) が指摘するように、ことばの解釈に関する議論は、対話(dialogue)だけではなく、対話的(dialogic)である、つまり、対話を通して新しい考え方を作り出していく。本論の結果をまとめれば、「(非)常識」とは何かと議論すると、「(非)常識」が社会的に構築されている概念であることが明らかになると同時に、その議論を通して「(非)常識」の幅を制限する。

近年において、常識がなくなっているという批判の声が頻繁に上がっている(山田, 2009を参照)が、

「(非)常識」への訴えの数から読み取れるように、決して「(非)常識」という概念への関心がなくなってきたわけではない。常識がなくなっているという危機感を覚えた国は日本が初めてではなく、18世紀のフランスや17世紀後半～18世紀前半のイギリスも同様な状態であった(Rosenfeld, 2014)。口語伝達から同時的口語伝達と文伝達の発達に伴い、多様な考え方が生まれやすく、既存の考え方への疑問が生じやすくなる傾向があったが(Durant, 2010, p.12)、同様なことが今日の情報に溢れているメディア社会についてもいえるであろう。

常識への欠如という問題が、他の社会問題に関する議論において引き出されることがある。常識への欠如に対する危機感が最も声明に描かれたのは投稿1だったが、当投稿は実は、懸念の対象を全日本に拡張している(例28)。投稿の内容も踏まえると、トピ主の本当の目的は自分が認識している若者問題に対する賛同を得られるためだと推測できるが、そうすれば、より広範囲で機能している若者問題にもかかわっているといえよう(Goodman, 2011; Toivonen & Imoto, 2011)。なお、例28のように「将来」へ着目を映すことにより、仮定的将来を提示するというReyes (2011) の別の正当化戦略も用いている点では、正当化を行うために複数の戦略を用いる典型例だといえる。

例28：日本の将来が心配だあ！（ふくろう、2016年12月25日）

発言小町における「常識」に対する関心度の高さから、ただ単に「常識」というものがなくなっているのではないことを示しており、実態がより複雑であることを示唆している。むしろ、「(非)常識」への訴えが上で観察した通り、非常に効果的な戦略であることが、「常識」という概念が現代日本においても重要であることを示している。「(非)常識」への訴えにより、交渉が行われることが多いため、「常識」がなくなっているのではなく、変容がまだ完了していない、もしくは概念としてより流動的になっている可能性がある。一方で、常識の欠如に対する危機感があるからこそ、適切な行動や信念の有り方に関する疑問が生じやすく、発言小町のような匿名な電子掲示板で「常識」に関する交渉が行われている可能性もある。共感的な賛同が得られた投稿1で見られたように、多様な利用者がいる中で、対話的に常識に対する疑問を打ち明けることが、不安定とはいえ、共通の価値観の構築に貢献し、発言小町を一つのコミュニティとして形作っていく。

結 論

上記の結果で、Reyes (2011, p.804) が予想した通り、政治談話における正当化は政治談話に限らず、電子コミュニケーションといった日常的な談話においても見られることが明らかになった。また、「常識」という概念に関して、交渉が行われる結果、概念的に流動的になっている可能性があることも示され、近代社会における「常識」の認識に対する変化が起きていると解釈できる。このように、「常識」への訴えが正当化ストラテジーとして機能すると同時に、ストラテジーとして用いることが、その概念を変化していくということが明らかになった。本研究において、「常識」への訴えがことに発言小町において重要であることが示されたが、なぜ他の電子掲示板では「(非)常識」への訴えがそれほど見られないという問題が残っている。

常識への訴えは、Nishimura (2008) のコミュニティ特定ことば (community-specific language) の一例としても解釈することが可能だが、発言小町を観察する際に無視してはいけない要因の一つはジェンダーである。投稿者・他利用者の性別が、自ら明記されていない限り判別ができないため、ここではあえて触れないことにしたのだが、読売新聞社側としても「女性向けサイト」として意識している大手小町の一部として運営されている以上 (稲沢, 2011)、発言小町における行動をより深く理解するのにジェンダーの問題を抜きにすることはできない。実際に、投稿をまとめた書籍として刊行された『発言小町：誰にも聞けなかった女の悩み』の題名からも分かるように、発言小町が「女性の赤裸々な本音が見え隠れしている」(小野田, 2008, p.2) 場として意識されており、その点自体が、売りにもなっている。

しかし、発言におけるやり取りが「女性的」と見なすことは危険である。むしろ、社会的に「女性的とされているもの」を理解するために役に立つであろう。発言小町は女性のための場とされているかもしれないが、当書の紹介として「次のページから、私たちの永遠なる世界へ」(小野田, 2008, p.3) という表現からも読み取れるように、むしろ、発言小町は場合によって男性 (= 「女たち」に属さない読み手という対立) にもアピールすることがあり、まさに「女性の心を知りたい」という男性ユーザーも増加傾向にある」(小野田, 2008, p.2) そうである。今後、こういった問題を追究することが、「(非)常識」への訴えと正当化に対する理解を深めることができるであろう。

参考文献

- Androutsopoulos, J. (2013). Participatory culture and metalinguistic discourse: Performing and negotiating German dialects on YouTube. D. Tannen & A. M. Trester (eds.), *Discourse 2.0: Language and New Media* (pp.47-84). Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- Barton, D., & Lee, C. (2013). *Language Online: Investigating Digital Texts and Practices*. London: Routledge.
- Berker, T., Hartmann, M., Punie, Y., & Ward, K. J. (eds). (2005). *Domestication of Media and Technology*. Maidenhead: Open University Press.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Coupland, J., & Coupland, N. (2009). Attributing stance in discourses of body shape and weight loss. A. Jaffe (ed.), *Stance: Sociolinguistic Perspectives* (pp.227-249). New York: Oxford University Press.
- Durant, A. (2010). *Meaning in the Media: Discourse, Controversy and Debate*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fairclough, N. (2003). *Analysing Discourse: Textual Analysis for Social Research*. London: Routledge.
- ふー (2017, 1月13). “おおらか”は非常識となった 発言小町 (2017年1月13日) <<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2017/0113/790696.htm>> (2017年2月10日)
- ふくろう (2016). 店内を走り回り続ける子供達。親は知らんぷり。常識持って！ 発言小町 (2016年12月22日) <<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2016/1222/788716.htm>> (2017年2月23日)
- Goodman, R. (2011). Shifting landscapes: The social context of youth problems in an ageing nation. R. Goodman, Y. Imoto, & T. Toivonen (eds.), *A Sociology of Japanese Youth: From Returnees to NEETs* (pp.159-173). London: Routledge.
- Harper, F. M., Raban, D., Rafaeli, S., & Konstan, J. A. (2008). Predictors of Answer Quality in Online Q&A Sites. *Proceedings of the SIGCHI Conference on Human Factors in Computing Systems*, 865-874.
- Hill, J. H. (2008). *The Everyday Language of White Racism*. Malden, MA: Wiley-Blackwell.
- 廣瀬幸生・長谷川葉子 (2010). 日本語から見た日本人—主体性の言語学 開拓社
- イチゴケーキ (2016). 「あなたの常識に任せます」と言われました 発言小町 (2016年12月9日) <<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2016/1209/787479.htm>>

- (2017年2月23日)
- 育休取得中 (2017). 今年も保育園落ちた仕事どうする? 発言小町 (2017年2月12日) <<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2017/0212/793860.htm>> (2017年2月16日)
- 稲沢裕子 (2009). あとがき 大手小町編集部 (編) いきなり婚約者のことが嫌いになりました。 ヴィレッジブックス pp.242-245.
- 稲沢裕子 (2011). おわりに 大手小町編集部 (編) 他人の何気ない一言に助けられました。 中央公論新社 pp.242-245.
- 井上史雄・秋月高太郎・荻野綱男 (2007). デジタル社会の日本語作法 岩波書店
- 石井徹 (2001). 常識の境界 社会心理学研究, 16(3), 133-146.
- Jaworski, A., & Thurlow, C. (2009). Taking an elitist stance: Ideology and the discursive production of social distinction. A. Jaffe (ed.), *Stance: Sociolinguistic Perspectives* (pp.195-226). New York: Oxford University Press.
- ここなつつ (2017). 貧乏なのに保育園落ちて働けない! 発言小町 (2017年2月7日) <<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2017/0207/793339.htm>> (2017年2月16日)
- 間宮 (2015). 親切? 常識? 電車の席 発言小町 (2015年11月4日) <<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2015/1104/738057.htm>> (2017年2月10日)
- まよまよ (2016). 非常識な義兄たちの披露宴に欠席する場合の祝い方がわかりません 発言小町 (2016年4月14日) <<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2016/0414/758670.htm>> (2017年2月23日)
- Millstone, N. (2012). 'Historicising Common Sense'. *Integrative Psychological and Behavioral Science*, 46(4), 529-543.
- momo ママ (2017). シャンプーとリンスを買いたい。 発言小町 (2017年5月18日) <<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2017/0508/803465.htm>> (2017年10月30日)
- ねこ (2016). 非常識な義弟夫婦とのつきあい方 発言小町 (2016年9月13日) <<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2016/0913/777466.htm>> (2017年2月23日)
- Nishimura, Y. (2008). Japanese BBS websites as online communities: (Im) politeness perspectives. *Language@Internet*, 5, 1-16.
- 小野田衛 (編) (2008). 発言小町: 誰にも聞けなかった女の悩み 竹書房
- Reyes, A. (2011). Strategies of legitimization in political discourse: From words to actions. *Discourse & Society*, 22(6), 781-807.
- Rosenfeld, S. (2014). *Common Sense: A Political History*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 塞翁が馬 (2017, 5月17). 隣家の嫌がらせに防犯カメラで対応。現場を捉えたら? 発言小町 <<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2017/0517/804558.htm>> (2017年10月24日)
- しまねこ (2011). 父の飲食の仕方が気になります。それに危険なんです。 発言小町 (2011年9月10日) <<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2011/0910/442442.htm>> (2017年10月24日)
- 小学館国語辞典編集部 (2007a). 常識 日本国語大辞典 (2007年) <<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=20020219c45aZLyT83RZ>> (2017年10月30日)
- 小学館国語辞典編集部 (2007b). 非常識 日本国語大辞典 日本国語大辞典 (2007年) <<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=20020385c054Ff3xLUC0>> (2017年10月30日)
- Tannen, D. (2006). Intertextuality in interaction: Reframing family arguments in public and private. *Text & Talk*, 26(4/5), 597-617.
- Tannen, D. (2007). *Talking Voices: Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Toivonen, T., & Imoto, Y. (2011). Making sense of youth problems. R. Goodman, Y. Imoto, & T. Toivonen (eds.), *A Sociology of Japanese Youth: From Returnees to NEETs* (pp.1-29). London: Routledge.
- トトロ (2017). 保育園に入れないと生活できないなんて 発言小町 (2017年2月5日) <<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2017/0205/793124.htm>> (2017年2月16日)
- Unser-Schutz, G. (forthcoming). Persuasion by commonality: Legitimizing actions through discourse on common sense in a Japanese advice forum.
- van Leeuwen, T., & Wodak, R. (1999). Legitimizing immigration control: A discourse-historical analysis. *Discourse Studies*, 1(1), 83-118.
- Winston, B. (1998). *Media, technology and society: A history: From the telegraph to the internet*. London: Routledge.
- 山田真茂留 (2009). 「普通」という希望 青弓社
- Zou, X., Tam, K.-P., Morris, M. W., Lee, S., Lau, I. Y.-M., & Chiu, C. (2009). Culture as common sense: Perceived consensus versus personal beliefs as mechanisms of cultural influence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 97(4), 579-597.

注

- i) 本研究の一部は、Unser-Schutz (forthcoming) に基づき発展させたものである。
- ii) 本研究は JSPS 科研費70632595の助成を受けたものである。
- iii) 発言小町の検索システム上の問題により投稿の全件数を正確に把握することが難しいため、上記の数字は、ほぼ全件に入っていると考えられる「は」で検索した結果によって得られた。

要 約

「常識」は、電子掲示板の発言小町で頻繁に出現するキーワードの一つだが、本論では、その理由の一つとして、「非常識」への訴えが行動の正当化に働くことにありと主張する。他者によって認められない行動や発話をするときに正当化を行う必要があるが、発言小町の投稿の談話分析を通し、多数不特定の利用者がいる匿名の電子掲示板が正当化を行うのに最適であることを示す。その際に、「常識」またはその反対語の「非常識」への訴えがことに有効である。なぜならば、「(非)常識」への訴えを通し、投稿者が理性のある持ち主として自らの位置付けが行えるため、理性への喚起による正当化ストラテジー (Reyes, 2011) に属すると考えられるからである。実際に、「(非)常識」で投稿者本人または他者を描写する投稿の詳細な分析を経て、「(非)常識」への訴えが成功するとき、ストラテジーであること自体が気付かれずに済むことが多いが、合意が得られず、正当化として不成立するとき、「(非)常識」への訴え自体に対する批判も見られることが明らかになる。「常識」なものが当然とされるのに対し、そうではないものが顕著に感じられる傾向 (石井, 2001) の結果として解釈できる。

キーワード：談話ストラテジー、電子掲示板、常識、正当化